いざというとき
子どもに寄り添う
ヒントに!

大学生が語った高校当時の心の中

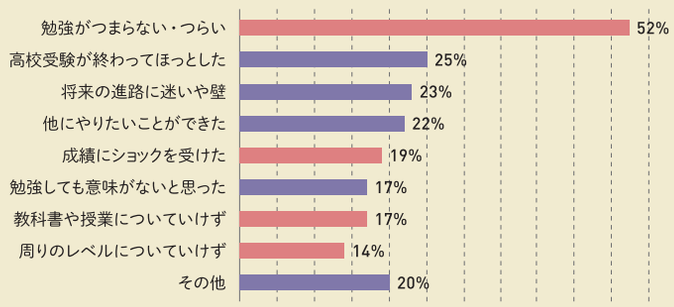
「あの時、私が勉強やる気ゼロだった訳」

高校生にもなると、子どもの心の中は徐々に見えづらくなるもの。
気持ちも知らずに一方的に勉強姿勢を咎めては、関係をこじらせるばかりです。
そこで今回は大学生に、当時話さなかった子ども側の本音をインタビュー。
リアルな体験談を参考に、保護者としての適切な接し方を考えていきましょう。

まずはアンケート結果から!

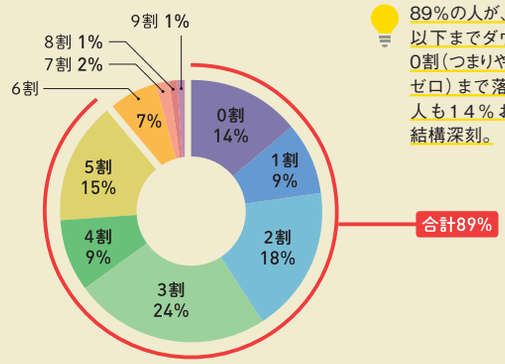
高校時代、勉強のやる気を失った経験がある全国の大学・短大1〜2年生、100人にインターネットで調査しました。まずは傾向をチェックしてみましょう!
調査期間：2021年1月初旬　調査協力：クロスマーケティング

図1 やる気を失ったきっかけは?（複数回答）



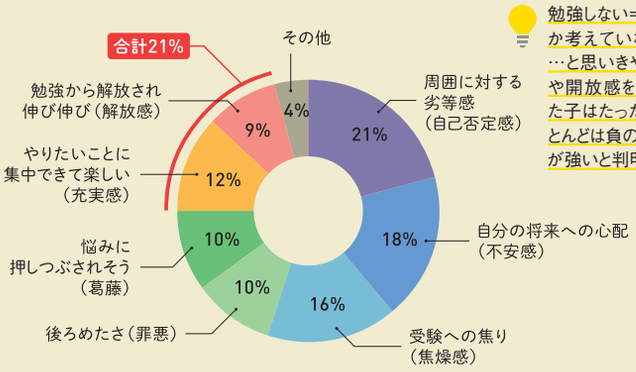
勉強がつまらない・つらかったと回答した人が半数以上。5位以下にも勉強そのものの壁が並んでいます。中学とは明らかに違う勉強の壁が存在することがよくわかります。

図2 入学時を10割とすると何割までやる気ダウン?



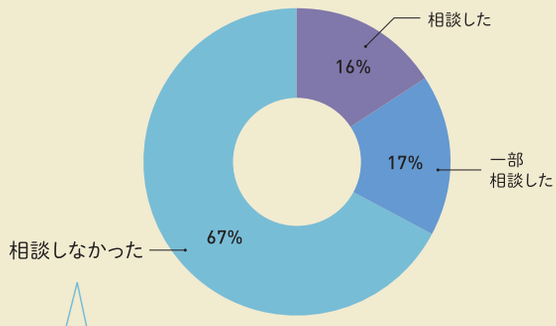
89%の人が、5割以下までダウン。0割（つまりやる気ゼロ）まで落ちた人も14%おり、結構深刻。

図3 そのときの気持ちで一番近いのは?



勉強しない＝遊ぶことしか考えていない怠け者…と思いきや、充実感や開放感を満喫していた子はたった21%。ほとんどは負の感情のほうが強いと判明。

図4 保護者に相談した?



しなかった理由

- 自分の問題だったので、自分で解決したかったため（大2・東京）
- 親に話しても意味ないと感じた（大2・岡山）
- いまいち理解されなさそうだから（大2・滋賀）
- ぐちぐち言われることがわかっていたから（短1・愛媛）
- やってないと知られると怒られると思ったから（大1・石川）
- 両親を不安にさせたくなかったから（大1・和歌山）
- 親は優秀だから（大1・秋田）

※都道府県は出身高校の所在地

相談しなかった人が67%。でもその理由を見ると、「（理解してくれるなら）（ぐちぐち言われないなら）相談したかった」という感情があるようにも読み取れます。

次は激白体験記！
ベテラン先生の解説付きです

西村和美先生

多摩地区高等学校進路指導協議会参与。都立高校の教諭を歴任後、現職。進路指導歴は20年以上に及ぶ。

取材・文／荻原美佳

CASE 1

不本意入学をバネにがんばった私。でもある日急に、虚しくなり不登校に。

父の言葉に奮起 リベンジをかけ猛勉強

高校受験に失敗した時、父に言われました。「がんばったかもしれないが**結果は失敗だ。入学先で挽回しなさい**」(＊1)。それで高1は、勉強も部活も、毎日朝5時から夜まで少しも手を抜かずがんばりました。辛かったけど、結果を逃す恐怖に駆られていました。年度末には学年トップの成績を修め、翌年の奨学金を獲得。ところが私が感じたのは、嬉しさより「この成績を維持するため、高2もまた地獄の1年を送るんだ…」という絶望でした。では何のためにがんばっていたんだろうと考えて気づきました。勉強したのは、自分がやりたいからではなく、父親に認めさせるためだったと。

偽りの自分に嫌悪 勉強に手が付かない

勉強は自分の気持ちを偽って周りに認められようとする行為に思え、嫌悪するようになりました。学校も休みがちになり、高2の1学期の成績は最下位に。

先生や父には「ちゃんと考えてるから」と強がって見せましたが、内心では、高校を辞めたい、でも勉強を放棄してこの先どう生きていくのか、自分には何の価値もないとどん底に沈んでいました。母が不登校を責めず「家事を手伝ってくれて助かるわ」などと肯定的に接してくれて救われましたが、そんな母でも高校中退には強く反対しました。

勉強とは違うことで 自分を試してみたくなる

自分が本当に好きなことで、どこまで通用するのか。そう考えて思いついたのが、小学生の頃から書き溜めていた小説を完成させ、新人賞に応募することでした。役に立たないことをしていないで学校に行けと言う父を宥めるため、登校だけはすることにし、毎日小説を書き続けました。

応募の結果は一次選考通過止まり。でも大人に混じって百名の枠に残れた嬉しさから、心境変化が起きました。小説の舞台にした西洋史をもっと深く学びたいと思うようになったのです。高2の終わりのことでした。

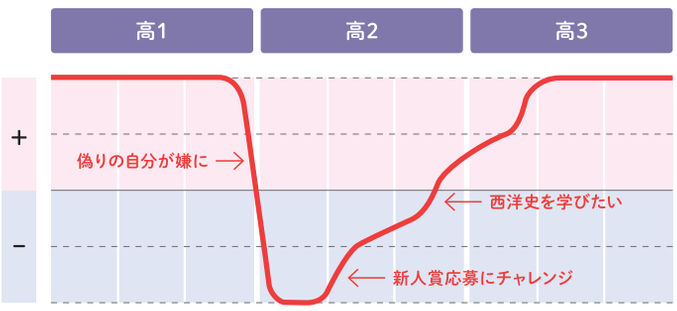
何としても大学で学びたい 高3から全力スパート

合格するには**AO入試しかない**(＊2)と思いました。志望校が決まった後の3～4カ月は、すべてを試験課題に傾けました。先生と何度も相談、何度もプレゼンを見てもらい、自分でも合格を確信できるほどに。こうして志望校に合格できたのです。

今思い返して、嫌悪していた勉強に再び取り組めた一番の支えは、高校中退に反対したときの母の言葉だった気がします。「あなたは大学の勉強ならきっと楽しいと思うはず」。自分のことを一番知る母の見立ては、ずっと心の奥に引っかかっていて、だから西洋史を学びたくなった自分の変化を素直に受け入れられたんだと思います。

今、大学3年生。学びたいことを学べる楽しさを噛み締めています。あの時、高校中退だけは許さなかった母にとても感謝しています。

【本人が振り返る**勉強やる気**バイオリズム】



M・A
東海大学文学部3年・
福島県私立高校出身

＼ Check! ／
このケース、先生はどう見る?

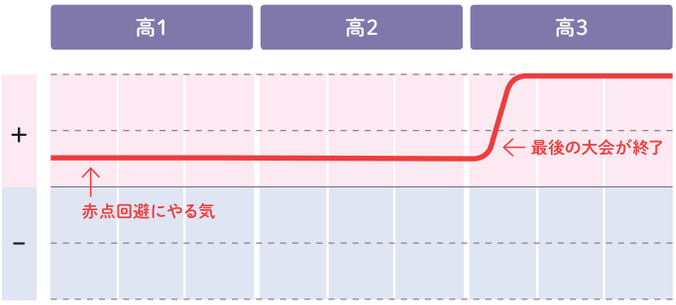
＊1 不本意入学の捉え方
不本意入学は引きずらないことが大切。多くの生徒が学習成績で分けられ進学した高校入試と違って、高校からの進路は、それぞれが希望する人生の方向へ分かれていきます。成績挽回のステージではなく、新たに自身の可能性を拓いていくステージと捉えて、スタートを切ってほしいです。そもそも「失敗」とは何か。ここからは大きな視野で、何が失敗で何が成功だと思うのか、そんなところから話し合っても良いですね。

＊2 AO入試への挑戦
悩みや葛藤を、小説の執筆という自分自身が夢中になれることでの挑戦に昇華させ、そこから西洋史という学びたいことを見出したのが素晴らしいです。強い進学動機があり、文学賞(一次選考通過の実績もあるので、まさにAO入試(現・総合型選抜)向きの生徒さんですね。とはいえ、苦しみの中でがんばった1年次の学習内容や、登校再開で確保できた取得単位数や出席日数も、進路実現の大切なベースになっています。

CASE 2

目の前の目標にしか集中できない。受験勉強は大会後、と腹を決めた。

【本人が振り返る**勉強やる気**バイオリズム】



勉強をがんばる意味がわからない

高校時代はほとんど勉強しませんでした。もともと、勉強は普通で十分、**上を目指す意味がわからない**（＊3）と思っていました。それでも中学までは、各科目の評価基準から普通レベルの点数や宿題提出率をつかみ、逆算して勉強するくらいは真面目でした（笑）。それが高校では赤点ギリギリキープになった。きっかけは、中3の時に出た、ローラースケートスピード競技の大会です。

サッカーのようにプロへの道がある競技ではないので、それまではただ目の前の試合でいい成績を出したくてがんばっているだけだった。ところがこれまで見たこともないような高いレベルの世界に衝撃を受け、考えが変わりました。たとえ将来がないスポーツでも、好きなことを突き詰めていけば、こんなふうにまったく知らなかった新しい世界が広がってるんだ！と思ったのです。

好きなことを突き詰めたい同時に複数は考えられない

高校では、全力でスケートを突き詰める決意をしました。練習方法、体づくり、栄養…すべて自分で世界レベルを基準に逆算し、わからなければ情報をもつ人を探し、教えを請う。それが習慣になりました。大会成績も上がっていき、楽しかったです。

進路のことは、正直、頭にありませんでした。**スケートへの気持ちが強すぎて、受験や将来の不安が湧く余地もなかった**（＊4）。高3になって、選手を続けるため大学進学を決めましたが、受験勉強は無理。7月のアジア選手権が終わってからと、腹を括りました。

目標さえ決まればがんばり方は同じ

選手権で、自分でも納得のいく成績が出せ、終了後はすぐ、受験勉強にシフトできました。練習環境の良い関東に拠点を移すことにし、志望校はスケートリンクとの距離で決めました。学力に関しては、スケート同様に目標からの逆算方式。赤本を解きながらどの単元をどのレベルまで上げるか定め、正しい情報をもつ高校の先生に教えを請う。それでは足りず塾にも入りました。閉館時間まで自習室に居残り、大学生や講師をフル活用。半年の猛勉強で、東洋大学の一般入試に受かりました。

うちの親は教育者ですが、今まで一度も成績を咎められたことはありません。スケートにも、応援は熱心でしたが「こうしたら？」と意見されたことはない。自分でしっかり逆算してやっているのを見ていたんだと思います。受験勉強の頃、「あなたはそういう性格だから、何があっても生きていける」と言われ、すごく心強かったことを覚えています。

大学では、他の分野で活躍する友人とも交流したり、留学で海外のスケート事情を学んだり、また世界が広がりました。もうすぐ卒業ですが、将来は、子どもたちが好きなことを通して世界を広げていく手助けになるような活動をライフワークにしていきたいです。

K・K
東洋大学文学部
英米文学科4年・
大阪府私立高校出身

＼ Check! ／
このケース、先生はどう見る？

＊3 上を目指す意味がわからない

「上を目指せ」という言葉に反発する生徒は多いです。「上ってなんですか？」と。そもそも「上」の価値は一つだけではないはず。自分が進みたい世界、もっと見たい世界こそが「上」なのです。それが見つかれば、勉強をする意味も自分でわかる。まずは、本人にとって目指したい「上」とは何なのか、話し合ってみると良いかもしれません。

＊4 勉強以外に夢中。受験はもうダメ？

没頭すること自体は、高校時代、味わってほしい貴重な経験です。部活動や学校行事はそのために設定されており、その中で進路につながる動機が育つことも多いです。達成感や区切りが、受験勉強へのバネになることも多いですし、団体の部活動の場合は、「励まし合い」「団結力」「部のプライド」といったチーム力が、個人だけのがんばりを超える進路実現になることもあります。むしろ主体的に惹かれるものがない温度の低い子のほうが心配です。

CASE 3

最後の文化祭。クラスを引っ張るため勉強放棄を決断。

中学までの努力で自信。進路には楽観的

中学でがんばった分、高校は遊ぶと決めていました。遅くまでスマホしたり授業中居眠りしたり。でも不思議とMARCHには行ける気がして**心配していませんでした**（＊5）。始めのうちは煩かった親も、だんだん放任になりました。

そんな私でも高3では絶対がんばりたいことが。文化祭のクラス対抗劇です。学校名物になっていて、3年でも9月まで全力でやり切るのが伝統でした。うちのクラスは華やかな人はいないけど、皆クラスが好きだったので、優勝するために総監督を買って出ました。

一番がんばりたい時に親の反対

クラスを引っ張るのは思ったより大変でした。人に頼るのが苦手な私は台本作りまで抱え込み、1学期の期末試験になっても完成しない大ピンチに。勉強時間が取れないだけでなく、気がかりで身が入らない。それに、ここで自分がテスト勉強を優先させたら誰もついてこなくなる気もして、テストは捨てる決意。ところがここで親と衝突。実は三者面談でMARCHは相当厳しいと指導されていたんです。「勉強が疎かになるなど本末転倒」「そんな無駄なことに身を削って」と、私の文化祭への想いを全否定。それも承知で不安と葛藤しながらがんばっていることも少しは認めてほしかった。それ以来、親と話さなくなりました。

その後、文化祭の本番まで、地味なクラスな分、演技力で勝負しようと、地域の演劇団体に演技指導をお願いに行ったり、その会場探しをしたり、頻発する意見のぶつかり合いを解決したり、何度もストレス性胃腸炎にかかりながらがんばり続けました。

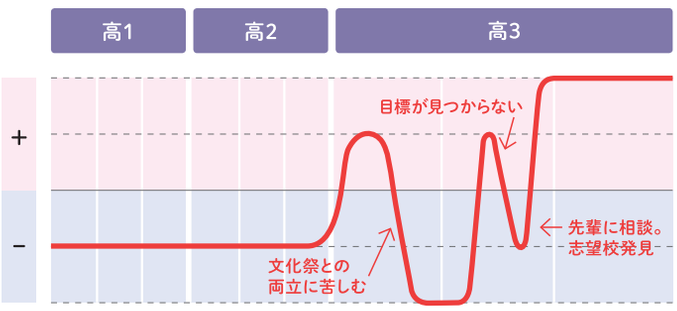
9月、文化祭を成功させ受験に専念するはずが…

文化祭は上位入賞で、クラスの最高の思い出を作ることができました。ところが**受験モードへの切り替え**（＊6）がなかなかできません。さすがにもう、MARCHは無謀と諦めましたが、それに代わる目標が見つからないのです。このままでは本当にヤバいと追い詰められました。でも親に相談したところで「やっぱりこうなった」と言われるだけ。やるのは結局自分だし、部屋でひとり悩みました。

やる気を取り戻せたのは、11月後半、同様に文化祭に打ち込んだ先輩に相談したおかげです。先輩の「本当は留学がしたかった」という話から、自分もそう思っていたことを思い出したのです。留学カリキュラムがある大学を目標にがんばれるようになり、今の大学に合格。留学の夢を実現することができました。

あれから4年。文化祭をがんばったことは後悔していません。大学で経営学を学んでいて、文化祭での経験と重なることが驚くほど多いからです。仲間をまとめ問題解決していくプロセスは組織行動論そのもので、将来につながるいい経験になりました。反省しているのは低学年での勉強態度。もう少し真面目だったら親もあれほど文化祭に反対しなかったんだと思います。

【本人が振り返る**勉強やる気**バイオリズム】



S・F
昭和女子大学
グローバルビジネス学部4年・
千葉県公立高校出身

＼ Check! ／
このケース、先生はどう見る？

＊5 勉強や進路に火がつかない

入学後の解放感は、高1の1学期まで。早く切り替えないと、新しい学校集団の中での位置づけ、生活スタイルが自他共に低く固定され、がんばろうと思った時にがんばりにくくなってしまいます。放っておいて火がつくものではないので、学校は進路指導ガイダンスなどで定期的に刺激を入れますが、二人三脚で生徒に伴走していくためにも、保護者の積極的な保護者会、進路指導ガイダンス参加をお願いしたいところです。

＊6 受験モードへの切り替え

秋の一大行事が終わると、学校中で、進路への切り替え行事が密度濃く開かれます。2年生や1年生も次の学年に向けて履修選択科目を決める時期ですし、3年生の模擬面接や出願指導、学習対策も本格化します。本来なら、切り替えの熱源としたい行事が、このケースでは燃え尽き現象化してしまいました。そんなときは同じ経験をした先輩への相談が良い方法です。

3人のケースからわかる

勉強やる気ゼロなわが子への接し方

ここまでのエピソードやアンケート結果から読み解けるポイントについて、西村先生にアドバイスいただきました。

自立期こその支援がその後の成長に

勉強しないわが子に、早く手を打つべきか、それとも自立に向け口出しを控えるべきか。そんな疑問に、西村先生は、**手を離すのはまだ早い**とアドバイス。「高校時代は、人生に繋がる大きな決断の時期。迷いや不安の中、**自分の価値を信じてくれる存在はとても大切です**」(西村先生)。

ケース1は象徴的な例。「大学の勉強は楽しく思うはず」と、お母さんがわが子の可能性を信じて辛抱強く高校中退に反対したことが、学びたい学問を見つけてやる気を取り戻す支えとなりました。

やる気を取り戻すきっかけは「勉強の目的がはっきりした」が最多(図5)ですが、それを見つける際は、**「幼少時に好きだったこと、得意なことがヒント**になることも。**生育過程を知る保護者ならではのサポート**ができそうです」

また西村先生からはこんな指摘も。「高校生は純粋。ひとつの価値観にとらわれつまずいてしまうことも多いです。**大人が複数の〝ものさし〟を見せることも大切**」

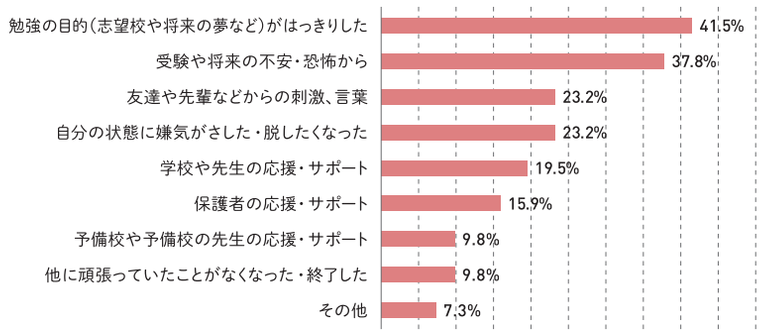
例えば文化祭で勉強を放棄したケース3。「文化祭を全力でやる伝統は、勉強との両立を協同作業の中で工夫してこそ。それに気づけば、互いに頼り合い触発し合った文化祭の成功は、受験へも大きな自信になったはず」

志望校を探す際も、**大人の広くて射程の長い視野は助け**になります。第一志望校でないとダメ、ではなく、ここならこんな夢や将来、ここならこんな学び方ができると視野を広げ、希望をもてる複数の将来像を一緒に検討してみるのもおすすめです。

では、自立が進みスポーツと受験の切り替えもできたケース2なら、手を離しても安心なのでしょうか。西村先生は彼の「親から意見されたことはない。しっかり逆算してやっているのを見ていた」と語った部分に注目。「**自立期に適切に理解・支援され、大人への信頼を育んだ**生徒は、大学や社会に出た後も周囲と良好な関係が築け、大きく強く成長することが多い」と語ります。

自立期の高校生にはそれにふさわしい支えが必要です。どんなときも「心」の手を離さず、温かく真剣に向き合っていきましょう。

図5 やる気を取り戻したきっかけで大きかったもの（複数回答）



西村先生からケース別アドバイス

＼成績低下・勉強方法不明／

伸び悩みで凹んでいるケース

学習内容が難しくてつまずいたなら、焦らずに一度基礎の問題に戻れば良いのです。教科担当の先生も心配していますから、気軽に相談し、学習方法や適切な教材をアドバイスしてもらうよう、勧めてください。次の定期考査までに挽回することが大事です。一方、高校入学後、これまで好調だった生徒に起こるケースとして、中学の時ほど良い成績が取れないショックからやる気を失うことがあります。この場合は、高校と中学では、学ぶ内容も速度も集団の学力もそもそも違い、中学までの貯金だけでは通用しないことを親子で納得すべきです。集団での位置づけや勉強習慣を低く固定しないためにも、高1の1学期までに再スタートを図りたいところです。

＼目的喪失・自信喪失・反抗／

勉強の目的を見失ったケース

高校では、まだ目標が見つかっていない1年の段階から、幅広い教科で地味で辛い基礎固めが始まります。この勉強の辛さを、保護者も理解してあげることが大切です。お子さんには、やがて夢を見つけたとき目指せる状態にあるための大事な土台づくりだと知ってほしい。各自の目標が見えてくるまでのこの地味で辛い基礎固めの時期は、好きな仲間と勉強の愚痴を明るく言い合い集団の力で階段を上っていくほうが良い。保護者としても、競争的な発想で追い詰めるより、所属集団で少しでも居心地良い関係が作れるように応援してあげたいところ。人間関係のトラブルなどを抱えているようなら、早めに確認し、取り除く支援をしていきましょう。

＼部活・バイト・恋愛／

今夢中なことがあるケース

役に立たないと決めつけず、それが本人にとってどんな意味をもつのか、将来どんな形で活きてくるのか考えることが大切。そのうえで、勉強とのバランスの取り方も早いうちから本人と話し合っておくと良いでしょう。夢中になった体験を活かす場合、推薦系の入試になることが多いので、欠席日数や未履修・未修得などの推薦・進級規定の確認も必要です。部活動の場合は、放課後や土日に学習時間が取れない分、1日6時間の授業時間を誰よりも集中することが大切。引退後のスパートを助ける土台になります。一方、明らかに本人の成長や学校生活に支障をきたすことに夢中になっている場合は、制止や一定の条件下で認めるという調整も必要です。